

子供の目線

1. 教育を考える一言

「教員は大人の目線と子供の目線を持たなければならない」

2. 背景

これは、いまいち人生の師と呼べる先生に高校を卒業しても出会えず、心に響いた言葉も別段なかった大学三年時に、偶然つけたテレビから聞こえてきた言葉である。どこの大学かも名前すらも定かではないが、中学校の教員を経験した後に大学教授になった人物のインタビューの中でこの言葉は語られていた。ここでいう子供の目線とは、生徒の視点になって生徒と接触することを指し、例えば流行りの遊びを知ることも目線に立つといえるとしていた。

当時、部活動のコーチを行っていた影響で漸く教員になることを決めた私であったが、教員生活における自らの指針となる軸の考え方を的確に表す言葉は持っていなかった。ただ、指導の際には、生徒の思考を常に考えていた。いくら効率の良く、効果的とされる練習方法を取り入れても、生徒の感情を疎外しては効果的に行えるとは限らないからだ。そのため、生徒自身に成りきることや自らの学生時代の経験に立ち返ることで生徒を見つめ直す実践を意識して行ってきた。このような背景と適合したからこそ、この言葉は私の胸に突き刺さったのだと思う。

3. 考察

この言葉は全ての教員が持たなければならないスキルを簡潔に示している。しばしば教員は「大人目線」になってしまうことが多く、授業においてもそれは同様にいえる。生活指導などを行っている、管理しなければならない立場にあるため、つつい自らを「大人の教員」という役割に当てはめてしまう。この役割に教員自身が慣れきってしまうと、「子供の目線」に立ち返ることが少なくなり、生徒を無視した独りよがりの授業や指導になる恐れがある。実際、私の学生時代にも、生徒のことを考えているようには感じられず、自らがやりたい授業をやっているような印象を受ける教員をよく目にした。

また、「子供目線」の習得は、生徒との距離感を縮めることを促進する効果もある。生徒は教員の人間性をよく見定めており、一方的な指導を行う教員には心を閉ざす傾向がある。

このように、「子供目線」を獲得することは重要であるが、「大人目線」と「子供目線」の線引きをどこでするかという問題点がある。「子供目線」の度合いを高め過ぎると、教員は単なる生徒になってしまう。基本的には「大人目線」で接し、必要に応じて「子供目線」になることが私は重要であると考えている。